

<ラウンドテーブル報告4>

こうしたら学生の学びは深まる —コーチングとピアラーニングによる学びのベース創り—

【企画者】 清水 亮(神戸学院大学)
【司会者】 清水 亮(神戸学院大学)
【話題提供者】 上野寛子(明治学院大学)
木村拓也(九州大学)
田中友理(名古屋大学)

1. はじめに

これからの大学教育では、初等中等教育において育まれた「学力の三要素」をより確実なものにすることがますます重要となってくる。そのためには、正しい「知識」とそれを「活用」する「スキル」を一人ひとりが習得できる授業が必要である。本ラウンドテーブルでは、大学初年次においてコーチングとピアラーニングを軸にした2つの授業実践の紹介をおこない、実際に受講した学生がどのような力を習得したのか、そして、その後の大学生活がどのように変化したのかについて学生自身に語っていただいた。初めに、明治学院大学教養教育センターの上野寛子先生に、「知的世界を楽しむためのアカデミック・スキル養成講座」で、どのような学び創りをされているのかについてお話しいただいた。次に、九州大学基幹教育院人文社会科学部門の木村拓也先生に「課題協学A」での試みをご紹介いただいた。そして、明治学院大学で、実際に「知的世界を楽しむためのアカデミック・スキル養成講座」を受講し、今年、名古屋大学大学院環境学研究科博士前期課程に進学した田中友理氏にどのような力を習得したのか、そして、その後の大学生活がどのように変化したのかについて語っていただいた。3つの話題提供の後、学生の学びを深める授業の創り方についてフロア全体で議論した。

2. 話題提供①—明治学院大学「知的世界を楽しむためのアカデミック・スキル養成講座」 上野寛子

2012年度に立ち上げた「知的世界を楽しむためのアカデミック・スキル養成講座」は、この9月で8シーズン目に突入した(4年間で12クラス開講)。「科学技術の発展にヒトはどう向き合うべきか」に関する旬のテーマを1クラス(16名)につき4テーマ準備し、同じテーマを選んだ学生とチームを組んで(4名/1チーム)、3ヵ月間かけて情報収集しながらアクティブな議論を通して深く掘り下げていき、40分の授業(自分たちが聴きたくなる理想の授業)を創りあげ、教育実習さながらの授業を学生自身がおこなうという内容である。授業第13週目と14週目には授業対決をおこない、ワークシートを用いることで授業理解度を把握したり、良かった点や改善が必要な点を指摘してもらい、40分の授業を総合的にみて学生たちが得点をつける。ベスト授業賞を獲得したチームは、ワークシートへの書き出しをもとに最後まで粘り強く、よりクオリティの高い授業へと修正作業を続け、最終回では開放空間で公開授業を実施している。

授業の学習目標は4つある。第1は、毎週情報を持ち寄って議論することによる「論理力」の養成。第2は、「社会人基礎力(前に踏

み出す力、考え抜く力、チームで働く力」の伸展。第3は、「情報リテラシー(情報の探索、評価、利用、発信の方法)」の習得。第4は、最終的に授業を創作、実践することによる、「プレゼンテーションの基本スキル」の体得である。

この授業を成立させるためには、チームの一人ひとりが授業外学習時間を確保し、連携し合いながら積極的に調べ学習を進めることが必須である。ピアラーニングの基本はここで形成される。授業序盤では情報リテラシーに関するレクチャーをおこない、中盤では統計データの活用とセットでエクセルを使い、パワーポイントでの創り込みのコツを紹介していく。この段階でも、チームの中でスキルを少しもっている学生がスライド作成を牽引しつつ、作成の仕方を教え合う場面が見られる。終盤では授業外で個別チーム指導時間を設け、各チームの進捗状況を把握しながら、授業の軸や論理的展開を確認し、情報源の確かさについて再確認させ、パワーポイント作成のコツを随時教え、最後にリハーサルをおこなう。毎週の授業でファシリテートしてはいるが、この個別チーム指導により、大学生の学習に必須であるアカデミック・スキルが効率的かつ横断的に定着するため、学生たちを急激に成長させる。学生への適切なタイミングでのコーチングはピアラーニングとともに学生の力を伸ばす大変重要な要素である。

3. 話題提供②—九州大学「課題協学 A」

木村拓也

九州大学では2014年度より基幹教育カリキュラムが新たに開始され、「基幹教育セミナー」と共に、「課題協学科目」が新設された。当該科目では、学部混成の学生集団に対するグループ活動が想定されており、学生が希望に応じてテーマ選択した150名程度の学生集団が学部構成比率を均等に50名ほどの3つのクラスに分けられ、文理混成の教員3名が

順次クラスをまわり、3クラス共通に設定した文理融合テーマに基づいてグループ活動を想定した演習講義を行っていく。本稿で取り上げる「知識と予測」のクラスでは、経済学部経済工学科、工学部電気情報工学科、同エネルギー科学科、歯学部、芸術工学部の学生が混在し、防災工学を専門とする教員、経済地理学を専門とする教員、教育社会学を専門とする教員の3名で担当した。

「知識と予測」というテーマのもと、クラス1「リスクとの向き合い」(防災工学)、クラス2「社会における「知識」の活用」(経済地理学)、クラス3「学問の盛衰を予測する」(教育・科学社会学)という演習内容を各クラスで設定した。学生が何をどう学び、何を大学生活でしていくべきか、という学生共通の課題について、各教員が提示する「学術的な見解」を元に議論できる素地を作るという構成で行った。また、開講にあたり、教員間で協議をしながら、教育方法・内容面で、互いの役割分担を確認して講義設計を行った。具体的には、学生を飽きさせないように、協学内容を異なる手法で行い、クラス1では、グループ発表を行うことを目的とし、Powerpointでスライドを作成させる、クラス2では、ディスカッション主体の講義を行い、クラス3では、個々人でExcelのグラフを作成させ、それを他人と交換して作成する個人レポートの執筆を行わせるなどした。また、注意した点として、内容的な連続性は担保することを行い、クラス3では、流行り廃りをグラフ化する(現実[データ]を知る)、クラス2では、知識のあり方を議論(中身を掘り下げ)し、クラス1では、リスクマネジメントを知る(考え方を学ぶ)という設計をした。更に、1日当番のグループリーダー制を取り、クラス全員に一度は必ずリーダーを体験させたり(クラス1)、グラフを作成し、そのグラフを交換したものしかレポートに使えないというルールを定めて、他人の仕事の出来が自身の

成果に直結することを体感させたりする(クラス3)など、グループの一員として責任感を向上させる教育方法を各クラスでは採用するなど、学生の参加意識を高める教育方法も採用した。

社会科学として、データから言えることを冷静に分析し、自身の思い込みを相対化することをクラスの第一の目的としているクラス3「学問の盛衰を予測する」の演習(木村担当)では、講義を順次受けていけば、最終レポートになる方式を採用し、学生が家に課題を持ち帰ることで負担感を増さないよう設計した。レポートテーマは、「高校時代の志望を今回の課題協学での演習内容から改めて問い直す」であり、1節：高校時代に学ぼうと思っていた学問分野について(1回目)、2節：大学で学ぶことや教養・学歴について考えたこと(1回目)、3節：自身が作成した年次グラフ(5個)についてのコメント(2回目)、4節：自身作成グラフ(5個)と人と交換したグラフ(30個)(3回目)の類型化(4回目)、5節：「研究とはどんな性質を持つものであり、それを踏まえてどういう学び・研究を目指すべきか」について自身の考えを述べる(4回目)というように、全ての回の演習内容をそのまま記録していくことでレポートになるように設計した。

クラス3の教育方法の工夫としては、

- ・専門分野の内容を他学部の学生に説明をする
- ・各自の作業物に責任を持たせる、他人のレポートに影響を与える仕掛け
- ・指示を守ってこなかった学生にはレポート交換に参加させない[メ切と指示の徹底化]
- ・Excelの使用法についてはペアを組ませ、わからないことがあれば、ペア同士で説明

の4点があり、クラス3の講義の狙いとしては、

- ・説明能力の向上—自分の分野を分野外の人

にわかりやすく説明する

- ・自分の考えをデータで相対化—データの作成の大変さと有用性の自覚、思い込みの排除
- ・膨大なデータを整理する技法を学ぶ—KJ法を体験して文章化することで考えを整理する
- ・グループ活動を通して、自身の頑張りがチームの成果に直結することを理解—他人と交換したグラフしか使えないというルール設定

の4点が挙げられる。グループ活動を円滑に進める意識と責任感を持たせるため、成果は個人活動であっても、各個人の演習内容が個人の演習結果の出来不出来に直結するように設計した。

4. 話題提供③—明治学院大学「知的世界を楽しむためのアカデミック・スキル養成講座」によって習得した力と大学生活の変化について

田中友理

多様な学生が入学する大学全入時代では、とりわけ初年次の教育が、その後の大学における学び方、ひいては大学生活に大きな影響を与える。大学時代を過ごした明治学院大学には、上位校の滑り止めとして受験し、入学した、いわゆる“不本意入学”と自認する学生、一般入試や推薦、AO入試などで第一志望として入学した学生、系列高校からエスカレーター式に入学した学生などが混在しており、入学の目的や学習意欲、これまでの勉強量が、学生によって著しく多様であった。

そのような状況においても、「どのように学ぶか」は学生一人ひとりに委ねられている。大学において、「学びの深め方」を習う機会ほとんどなく、レポートやパワーポイントによる発表は、できることを前提として課せられる。レポートの基本的な書き方やそれに関する参考文献が提示される授業もあるが、大半の授業ではこうした情報も与えられ

ない。文章を書くことや発表することは大学入学前までに学んでいるべきことであり、大学でわざわざ学ぶようなことではないかもしれない。とはいえ、客観的かつ論理的な内容にするための情報収集や根拠の提示の仕方を知った上でレポートを作成し、他の人に伝わりやすいように発表するスキルをはじめから持っている学生は少なく、特に多様な学生が集う本校のような大学では、ごくわずかしかな存在しない。

大学で「どのように学ぶか」がわかっていない場合、学生は自己流のやり方で課題に取り組むしかないのが現状である。自分なりの方法で正しい「知識」やそれを「活用」する「スキル」を身につけ、学んでいける学生も存在するものの、そこまでの意欲がない、また意欲があってもやり方がわからない多くの学生は、あやふやな知識のまま課題をこなすことになる。たとえば、アカデミック・ライティングやPCソフトの使い方など、個々のスキルを身につけるような授業を受講したとしても、「学びの深め方」がわからなければそれをうまく活用できないため、学生は身につけた能力を十分に発揮することができない。

「知的世界を楽しむためのアカデミック・スキル養成講座」を受講し習得したものは、「学び方のロールモデル」であると言える。自ら学んでいくために、どのように正しい「知識」を得て、それをどのように「活用」すればいいかを知ることができ、さらに授業を通じて活用するために必要な「スキル」を身につけることができた。この講座は一つのテーマについて掘り下げていくという流れでおこなわれるため、この授業で学んだ一連の流れは、自分が興味をもったこと、例えば自分の専門分野について深く学ぶときにもそのまま応用可能である。一度、新しい世界を学ぶことの面白さを体験すれば、他の授業を受けるときの意欲向上につながり、ひいては自ら学ぶ姿勢を身につけることができる。この

授業を通じて、「論理力」や「社会人基礎力」、「情報リテラシーの習得」や「プレゼンテーションの基本スキル」のすべてを身につけることができた実感しているが、何よりも意味を持っていたのは、大学における「学び方のロールモデル」の習得と、「学びの面白さの体験」である。

次々に出されるレポート課題や発表を、なんとなくでしかこなせない状態を続けると、学びの思考回路は育たず、新しいことを吸収する意欲が失われるといった悪循環に陥ることになる。大学の初年次で「知的世界を楽しむためのアカデミック・スキル養成講座」のような授業が多く実践されれば(できれば必修化)、学生は、課題をこなすたびに力を伸ばすことができ、その後の大学における学びが深まり、新しい扉を開くことができる自分へと変化していくはずである。

5. おわりに

2006年2月号以来、毎年2月に大学特集を組んでいる『中央公論』の2011年2月号のテーマは、「大学の耐えられない軽さ」。そのテーマの下、立花 隆氏の「大学再生には、今一度の「一九四五年」体験！」という論稿が掲載されている。

明治学院大学の上野寛子先生の「知的世界を楽しむためのアカデミック・スキル養成講座」、九州大学の木村拓也先生の「課題協学A」の事例と、田中友理氏による「知的世界を楽しむためのアカデミック・スキル養成講座」のインパクトをもとに、立花氏が当時、論稿で指摘されたことの多くが、お二人の授業実践の中で、現実になっていることをおわかりいただけたはずである。

- ・リアルな授業は必要。
- ・学生に本物のスキルを身につけさせるには、双方向対面コミュニケーションが絶対に必要。
- ・「調べて、書く」ことを徹底的に課す。

- ・提出された文章に「ここが面白い」, 「ここは駄目」とコメントをつけてクラスのHPに公開する。
- ・そうすると学生が俄然食いついてくる。
- ・同年代の人間がしていることというのは, すごく刺激になる。
- ・さらに毎回, 全学生に「リアクションペーパー」を出させて, 授業に対する反応を見る。
- ・選抜した学生にパワーポイントを使ったプレゼンをさせて, 競争心をあおる。
- ・大学の質は, 「相互刺激の総量」で決まり

ます。教師と学生の相互刺激はもちろん, 学生と学生の相互刺激が重要で, それを引き出す場を用意し, 引き出す刺激を与えることが重要。

話題提供後, 話題提供の事例と立花氏のポイントを念頭に, フロアから, 所属の大学の事例を, ご紹介いただき, 全体で, 学生の主体的な学び, 生涯学び続け, 主体的に考える力をどうしたら推進できるのかを議論することができ, すばらしいラウンドテーブルとなった。